

## 「杜子春」における芥川龍之介と家族

——「人間らしい、正直な暮し」をめぐる——

宮坂康一

### 一 はじめに

芥川龍之介「杜子春」は、大正九年七月に『赤い鳥』に掲載された。単行本『夜来の花』（大十・三、新潮社）に初めて収録された後、単行本『沙羅の花』（大十一・八、改造社）にも収録された。この『沙羅の花』収録本文には、「大正八年二月」との執筆年月が記されている。つまり、本作の執筆から発表までには、一年半ほどのズレがあることになる。

こうしたズレが生じた事情について検討するためには、執筆時期である大正八年頃に、芥川龍之介が置かれていた状況について見ていく必要がある。当時の芥川の状況について明らかにすることで、本作には我々が思う以上に、芥川の実生活上の出来事が反映していることが見えてくる。

特に、この童話において杜子春が最後に口にする「人間らしい、正直な暮し」<sup>1</sup>の台詞については、より重い意味を見出すことができ

よう。こうした台詞は、芥川の小説作品では見出せないものであり、こうした台詞を杜子春に言わせたい、言いかえれば、芥川自身がこうした台詞を口にした事情があったことを推察させる。

本稿では、以上のような問題意識に基づき、「杜子春」と、大正八年前後の芥川龍之介の実生活との関連について検討すること、作品及び作家に対する、新たな捉え方を提示したい。

### 二 「人間らしい、正直な暮し」への過程

仙人である鉄冠子の助力によって、大金持になった後、貧乏になることを繰り返した杜子春は、「人間は皆薄情です」と口にする。それまで親しく接していた周囲の人々は、杜子春が金銭を使い果たした途端、見向きもしくなくなる。こうした現実直面したことで、あらゆる人間は利害関係でしか動かない、「薄情」な存在だという、悲観的な人間観が形成されている。

この世には、金銭のみを媒介にした、薄情な人間関係しか存在しないと見た杜子春は、鉄冠子に請い、自分もまた仙人になることを志す。ここで杜子春は、世俗の世界に常につきまとう金銭を超えた、新たな価値観の世界で生きようとしている。そのためには、仙人の世界への案内者となる鉄冠子を頼る以外にはない。このとき、杜子春もまた、自己の利害のために周囲の人間を利用していることになり、金銭目当てで杜子春に近づいた人間と大差はないと言えよう。

杜子春はその後、仙人になるための修行として、あらゆる責め苦に耐え続ける。確かにこれは、強い意志に支えられた、余人には容易に真似できない行動と言える。しかし、その意志の根底には、新たな価値観を何としても身に付けるといふ動機が存在しており、あくまで杜子春は、自己の利害のためにすべての行動を行なっている。

人間によって絶望させられた杜子春の心は、やはり人間によって、再度揺さぶられる。「心配をおしでない。私たちはどうなつても、お前さへ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね」と語る母の体は、鬼が振るう鞭によって痛めつけられている。母が責め苦に耐えるのは、自身のためではなく、息子である杜子春、すなわち自己以外の人間を思つてのことだ。かつて杜子春を絶望させた、利害関係でしか動くことがない人間たちと、そのあり方は著しい対照をなす。仙人になるといふ、自己の利益のために

鉄冠子に近づき、あらゆる責め苦に耐えた杜子春ともまた、母のあり方は相違する。自身を含め、杜子春は自己の利益のためにのみ動く人間しか知らなかった。だからこそ、自身のためではなく、自己以外の人間のためにその身を投げ出す人間のあり方は、杜子春の心を強く動かす。鉄冠子の禁を破り、「お母さん」と口にした杜子春は、真の意味で、金銭を始めとする利害関係とは異なる価値観をこの時見出したと言える。

仙人になることを自ら断念した杜子春に、鉄冠子は、「もしお前が黙つてゐたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまはうと思つてゐたのだ」と語る。この台詞からは、自己の利益のために周囲の人間、特に家族を利用することを鉄冠子が明確に否定していることが分かる。世俗とは異なる価値観を身に付けているはずの鉄冠子もまた、利益のために、最も身近な人間である家族を利用することは、許されない行為と見なしている。

こうした一連の流れを経て、初めて杜子春は、「何になつても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです」と口にすることが可能になる。この台詞からは、利害関係ではなく、強い愛情で結ばれた家族との暮しを築こうとする、杜子春の信念を見て取ることができるといえる。鉄冠子から与えられた大金を蕩尽するばかりで、金銭目当ての人間しか周囲に存在しなかった頃の杜子春には、こうした考えは無縁のものだったろう。仙人となり、世俗とは異なる価値観を得るといふ、一度抱いた目標は実現されなかった。だが、世俗にとどまり

つつも、なお尊い価値観に基づいた人生への第一歩を、杜子春は手にしたと言える。

このように見てくると、杜子春が自らの生き方を見出す上で、家族との関係は欠かせない要素となっていることが分かる。杜子春が志向する、「人間らしい、正直な暮し」において、この関係はその基盤となるものである。ここで芥川作品全般に目を転じれば、先述のように、小説ではこうした「暮し」への率直な願望が語られた例を見出すことは難しい。「杜子春」において、こうした願望を主人公に語らせることが可能になったのは、童話という形式も大きく関与していると考えられる。

尾崎瑞恵「芥川龍之介の童話」（昭四十五・六『文学』）は、芥川の童話における特徴として、「小説では全く見られなかったような積極的な生き方」や、子供たちに向けられた「明るい希望と夢」を指摘する。そこには、童話作品の執筆を通じて、自己の生活における「希望や夢」を見出そうとする芥川の願望が働いていたのではないか、と尾崎は見ている。

ここに、「御伽噺という枠のなかで、龍之介ははるかに自由に、心情のうたをかなでることに成功している」という、三好行雄の指摘<sup>2</sup>を加えれば、童話作品という舞台が、芥川にとって持っていた意味がより明確に浮かび上がってくる。すなわち、童話作品は、芥川にとって自身の願望や意欲をのびのびと表現することができる、貴重な舞台だったのではないか。三好行雄は、「当時、童話が文壇の

そとに存在して、ほとんど批評の対象とされることがなかったという事実」を指摘しているが、芥川自身も、こうした事情は理解した上で、童話の創作に臨んでいただろう。ならば、童話作品においては、芥川の様々な心情が、小説の場合以上に、作品内容に大きく反映しているのを見ることができよう。

こうした前提に立つことは、「杜子春」の発表が執筆から一年半ほどズレたことの手掛かりを得る上で、大いに役立つと考える。

### 三 母のあり方

結論を先取りして言えば、「杜子春」には芥川龍之介の実生活上の事柄が、様々な形で反映していると考えられる。しかし、自己の作品を、実生活の反映と見られることを嫌った芥川<sup>3</sup>が、作品の執筆後、その発表を躊躇したため、作品が世に出るまでに一年半のズレが生じたのではないか。反映した事柄としては、母への思い、金銭的な事情といったことが挙げられる。まずは、杜子春が真の生き方を見出す契機を作った、母のことについて見ていきたい。

「杜子春」の原典である「杜子春伝」<sup>4</sup>では、杜子春は仙人になるための修行の一環として、女性に姿を変えられる。男性と結婚し子供も授かるのだが、修行のため話すことは禁じられているので、口を利くことはできない。不満を覚えた夫が子供を石にたたきつけたのを見て、杜子春は思わず「ああ」と声を上げる。

このように、「杜子春伝」では母となった杜子春が、息子への愛情から思わず声を出してしまう。これに対し「杜子春」では、痛めつけられる母を見て、息子である杜子春が「お母さん」と呼びかける。母と息子の関係が、原典と本作では逆になっていることが分かる。母子関係の逆転は、言うまでもなく、芥川によってなされた改変の結果生じたものだ。この改変の背景について考える手掛かりとして、芥川と実の母との関係に着目してみたい。

周知のように、芥川は作家として活躍を始めて以降、実の母のことを作品で扱うことを避け続けた。初めて母のことに触れたのは、大正十五年十月に『改造』に掲載した「点鬼簿」の、次のような箇所になる。

「僕の母は狂人だった。僕は一度も僕の母に母らしい親しみを感じたことはない。(中略) かう云ふ僕は僕の母に全然面倒を見て貰つたことはない。何でも一度僕の養母とわざわざ二階へ挨拶に行つたら、いきなり頭を長煙管で打たれたことを覚えてゐる。」

大正十五年は、芥川が作家として出発してから、約十年後の時点となる。それだけ、芥川にとって母のことは触れたくない話題だったことになる。芥川の生後すぐに別居し、優しくしてくれたことも、親切に接してくれたこともない実の母<sup>5)</sup>。こうした母については、文壇からの注目度が高い、小説作品では触れることがはばかられたことは想像に難くない。

しかし、童話においても事情が共通であるとは限らない。文壇か

らの注目度が高くなかった童話作品においては、触れたくない対象であった母について、芥川は直接的な形ではないが、自己の心情を反映させつつ触れてしまったのではないか。「杜子春伝」から「杜子春」への改変において、芥川の願望が作用しているとの指摘は、早くからなされている。一例として、村松定孝に以下のような言及がある。

「彼〔芥川〕はおそらく、その生涯で、一度も実母に『お母さん。』と呼びかける機会がなかったであろう。たとえ呼びかけても答えてくれる母ではないのである。現実ではなしえなかったこと。世の子供たちが母に甘えかける言葉を自分も一度は発したかった、そのほかない願いと夢とが、あそこで杜子春をして『お母さん。』と叫ばせることになったのではあるまいか。」<sup>6)</sup>

極端なことを言えば、杜子春が、無条件の愛情によって動く人間との関係を知るためには、必ずしも家族を持ち出す必要はない。友人や恋人といった、血縁関係のない人間であれば、杜子春に対する、利害関係抜き愛情は一層尊いものとして表現できたかも知れない。しかし、本作では動物に姿を変えられた家族が用意され、息子に対する無条件の愛情が杜子春の心を大きく動かすことになる。村松定孝が指摘するように、ここには、母親に対する芥川の願望が働いているのではないか。自らの苦痛は顧みず、全てを投げ出しても息子の幸福のみを考える母親の姿に、こうあって欲しかった、芥川にとっての理想の母親像が反映していると見ることは、十分首肯

できる見解だろう。<sup>7)</sup>

こうした母親像を書き上げた芥川は、自作についてどう考えただろうか。芥川にとっても、こうした母親像を書いたことは、意外な成り行きだったのではないか。杜子春の母のあり方に、芥川自身の願望が反映しているとすれば、そうした作品を発表することは、やはり躊躇されたと考えられる。小説作品において、芥川が実の母のことに触れるのは、まだ先のことになる。童話と小説では、読者の受け止め方は異なるだろうが、それでも芥川は、直接的な形ではなくとも、自己の願望が反映している作品を、執筆後直ちに発表することはためらったのだろう。その結果、発表に至るまでに一年半という思いがけず長い期間が生じてしまったのだと考えたい。

#### 四 一家の主人としての芥川

続いて、作品執筆時の芥川の、金銭的な事情について検討したい。

松本寧至は、「杜子春」が書かれた背景として、芥川が海軍機関学校での勤務から離れ、『大阪毎日新聞』に迎えられたことに着目した上で、次のように述べる。

『蜘蛛の糸』と『杜子春』をつなげると、海軍機関学校の地獄のような勤めから、抜け出したいと思つて成功しなかつたときに『蜘蛛の糸』をかき、ようやく『毎日新聞』に社友という形で脱出し

て、小説を書く、著述に専念することが出来るようになったという、ホツとした気持ちと、反省もこめて書いた童話が『杜子春』でありました。<sup>8)</sup>

「蜘蛛の糸」と「杜子春」を関連付けた上で、芥川の実生活と巧みに結びつけた、示唆に富む見解と言える。「杜子春」に、芥川の母の影を読み取る論考は、既に見たようにいくつか存在するのだが、芥川が置かれていた職業面での事情と結びつけるものは珍しい。確かに、本作が執筆された時期である大正八年二月に至る一年ほどの期間において、芥川は職業、すなわち金銭に関わることで多くの苦労を経験している。このことは、芥川の間人に大きな影響をもたらしており、「杜子春」にもその反映が見られると考える。以下、大正七年以降の、芥川の実生活上の出来事について確認していきたい。

大正七年二月、芥川は塚本文と結婚する。結婚直後の家庭の様子について、芥川は「或阿呆の一生」の「十四 結婚」（昭二・十『改造』）において、次のように回想している。

「彼は結婚した翌日に『来勿々無駄費ひをしては困る』と彼の妻に小言を言った。しかしそれは彼の小言よりも彼の伯母の『言へ』と云ふ小言だつた。彼の妻は彼自身には勿論、彼の伯母にも詫びを言つてゐた。彼の為に買つて来た黄水仙の鉢を前にしたまま……」

小説なので、割り引いて考える必要があるが、結婚直後の芥川家

の様子は、決して明るくなかったとされている。その理由については様々に考えられるが、「無駄費ひ」、すなわち金銭に関わる事柄はその一因であったのだろう。

実際、芥川は大正七年四月に、海軍機関学校教官の身分のまま、薄田泣菫の仲介により、『大阪毎日新聞』の社友となっている。正式な社員ではなく、年に何本か小説を書くことで、毎月月給が支給されるといふ形式だった。「僕も幸大阪毎日がきまつたので さう筆の労働をしなくとも生活には困るまい」という久米正雄宛の書簡（大正七年四月六日）からは、芥川の安堵の気持ちがかがえる。しかし、海軍機関学校に勤務しつつ新聞社の社友にもなるという二重身分を選択したことは、機関学校からの給与だけでは、芥川家の家計が苦しかったことを示している。

海軍機関学校での勤務に対しては次第に不満が高まっていたようで、大正七年八月には、転職を考え始めている。小島政二郎に相談もしており、「もし僕が東京へ舞ひ戻れる機会があつたら然る可く僕の為に運動して下さい目下愈々地方の小都会気風がいやになつてゐる所ですから」（大正七年八月二十七日）という書簡も残っている。ここでは、書簡という私的な文書の中で、機関学校での勤務に対する不満を述べているが、公の場に発表した「永久に不愉快な二重生活」（大七・十一『新潮』）においても、同様の不満が示されている。

「職業として私は英語を教へてゐるから、そこに起る二重生活が

不愉快で、しかもその不愉快を超越するのは全然物質的問題だが、生憎それが現代の日本では当分解決されさうもない以上、永久に我々はこの不愉快な生存を続けて行く外はないと云ふ位な、甚平凡な事になつてしまひます。」

文藝雑誌である『新潮』に発表された文章であり、不特定多数の目に触れるものであることは言うまでもない。にも関わらず、現状に対する「不愉快」を堂々と筆にしていることから、教員としての職務に対する不満は、相当強くなつていたと思われる。

九月には、慶応予科の教員であつた小島政二郎を通して、慶応義塾英文科教授招聘の話が出る。大正七年九月二十二日付の、小島政二郎宛の芥川書簡は、その事情を伝える。「慶応の件来年から海軍拡張で生徒が殖え従つて時間も増すのと戦争の危険も略々なささうなとで急に毎日の横須賀通ひが嫌になつたのです 来年の四月頃からでも東京へ舞戻れば大慶この上なし（中略）何しろ横須賀はもう全くだらなかつた」。

この書簡にあるように、海軍機関学校での授業時数は、次年度から倍以上になることが決まっていた。このことは、芥川が転職を真剣に考えるようになった一因となつたろう。

十一月には、慶応義塾招聘の件が具体化し、履歴書を提出したが、この話は実現していない。その理由について、松本寧至は、『毎日新聞』から誘いがあることを小島（政二郎）に喋つたこと<sup>9</sup>であります。これでおそらく、慶応大学への就職は失敗しました<sup>9</sup>

と、小島政二郎の関与を想定している。しかし、後述するように原因は別の所にあると本稿では考える。

年が明けて、大正八年一月十二日付の書簡では、芥川は大阪毎日新聞社員としての採用を、薄田泣菫に相談している。

「私はあなたの方の社の社員にしてはくれませんか 私は今の儘の私の生活を持続して行く限りとても碌な事は出来さうもない気がするのです（中略）今の私はあなたの方の社から来る金と学校の報酬とで先づ生活だけは保証されてゐる訳です がいくら飯を食ふ心配がなくつても自分のしたいと思ふ仕事も出来ずしなければ義理のすまぬ仕事も出来ないと思ふ事は決して愉快な事ぢやありません そこでいろいろ考へた末にこの手紙をあなたへ書く氣になつたのです」

職業、すなわち金銭に関わることについて、かなり深刻な内容を相談している。芥川の要望は、『大阪毎日新聞』の正社員となり、出勤はせず、年に何本か小説を書くことで給与を貰うというものがあった。夏目漱石が『朝日新聞』専属作家となつた場合のことが念頭にあつたと思われるが、教員としての仕事から完全に離れ、小説を書くことのみに専念したいという意思の表れだろう。

『大阪毎日新聞』の話は短期間で具体化し、二月には菊池寛とともに正社員としての採用が確定するに至る。これに伴い、『大阪毎日新聞』からの給与は、従来の月額五十円から、百三十円に増加する。これではようやく、約半年にわたる転職活動は無事終わりを告げ

たことになる。

このように見てくると、大正七年から八年二月にかけての芥川は、職業、すなわち金銭に関わることで奔走していたことが分かる。その間、人間関係に関わることで様々な苦労を経験しただろう。周囲の人間の嫌な面、見たくない面を見ざるを得ないことも度々あつたと考えられる。金銭に関わることであるから、不快さや深刻さの度合いも強かつたに違いない。こうした状況から脱出できたのが大正八年二月、すなわち、『沙羅の花』所収本文に記された、「杜子春」が執筆された時期であつた。この事実を踏まえた上で、「杜子春」を読み直した場合、杜子春の人間観には、芥川自身のそれが強く反映していると思われることができる。

杜子春は、お金がある時は近寄ってくるが、無一文になればすぐに離れていく周囲の人々を見て、「人間は皆薄情です」と口にしてゐる。芥川自身もまた、職業、すなわち金銭に関わることで奔走し、周囲の人々の「薄情」さを見ざるを得ない、辛い状況を経験していただろう。そうした状況からの脱出を果たした芥川は、金銭による苦労や失敗を重ねる杜子春に、かつての自身の苦境を重ねて描写したのではないか。芥川自身が、金銭に関わることでかなりの苦労を重ねたからこそ、杜子春の、人間は利害関係でしか動かないという失望には、一層の生々しさがこもる。

人間に対する失望、ということ言えば、その対象には芥川自身も含まれていると考えられる。というのは、慶応義塾招聘に関する

話は実現しなかったが、これは芥川自身が断つたためと見られるからだ。『大阪毎日新聞』での正式採用が確定した時期である、大正八年二月二十三日付の小島政二郎宛芥川書簡から、そのことがうかがわれる。

「慶応の方を一旦運動を願つて置いて中途で変心したのが沢木〔慶応義塾大学教授・沢木四方吉〕さんや何かに不快な思ひをさせやしませんでしたかこれは少々気が咎めるから伺つて置きます」

慶応義塾招聘の件はかなり具体化し、履歴書を提出するところまで進んだが、この書簡を見る限り、この件は芥川自身が断つたようだ。このことで、慶応義塾側に「不快な思ひ」を抱かせたのではないかと、芥川は危惧している。慶応義塾側から招聘の件を断つてきたのであれば、芥川がこうした懸念を抱く必要はないはずだ。このことから、最終的に『大阪毎日新聞』に正社員として採用されるに至るまでに、芥川自身が義理を欠く行為、道義に反する行ないを余儀なくされた状況もあったと考えられる。

杜子春は、世俗とは異なる価値観を身に付けるべく、仙人となるための辛い修行に耐える。その過程において杜子春は、自己の利益のために、身近な人間である鉄冠子を利用している。自己の利益しか眼中にないという点を捉えれば、杜子春自身が絶望した、利害関係のみで動く人間たちと変わりはない。こうした杜子春のあり方は、義理を欠く行為を行なわざるを得なかった、かつての芥川自身

の姿が重ねられているのではないか。

このように、「杜子春」における人間の捉え方には、大正八年二月に至る、芥川自身の辛い経験が大きく反映している。このこともまた、「杜子春」が実際の執筆後、一年半の期間を空けて発表されたことの原因となっているだろう。自身を含めた、人間の嫌な面、見たくない面をまざまざと見てきたばかりの芥川にとって、杜子春の人間観、及びそのあり方は、確かに実感がこもってはいるものの、嫌悪感すらもよおす、生々しさを伴うものとなってしまったのではないか。だからこそ、発表は一時見合わされ、結果的に一年半という意外に長い空白期間が生じたのだろう。

## 五 父・夫としての芥川

職業、すなわち金銭に関する苦勞は、芥川が家計を支える義務を負った、一家の家長であるという事実と関わる。この事実と、先に検討した、母に関する芥川の願望ということを考え合わせると、両者の間には家族という要素を共通項として見出すことができる。

さらに、「杜子春」発表に至るまでの芥川の年譜的事項をたどっていくと、大正九年に、家族ということに関して大きな出来事が生じていることに気づく。この年の四月に、芥川にとって初めての子供である、長男の比呂志が誕生した。長男の誕生について、芥川は大正九年四月二十八日付の恒藤恭宛書簡にて、次のように報告して

いる。

「赤ん坊は比呂志とつけた 菊池〔寛〕を God-father にしたのだ  
赤ん坊が出来ると人間は妙に腰が据るね 赤ん坊の出来ない内は  
一人前の人間ぢやないね」

この書簡における、芥川の手放しの喜びよりは注目に値する。前節に引いた、「或阿呆の一生」における、結婚直後の家庭の暗さとは、明確な対照をなしている。

比呂志が生まれる前、塚本文と結婚した時点で、芥川は夫、すなわち一家の家長となった。しかしそのことは、直ちに喜びをもたらすものではなかった。一家の経済的窮乏から、海軍機関学校に勤務しつつ、『大阪毎日新聞』の社友をも務めるという「永久に不愉快な二重生活」を余儀なくされる。ただでさえ苦痛である海軍機関学校の仕事は、その後さらに厳しさを増していく。しかしながら、家計を支える一家の家長として、安易に職を投げ出すことは許されない。

そうした中で、収入は維持しつつ、状況を少しでも好転させようと、芥川は必死の努力を続ける。その過程では、金銭にまつわることで、多くの人間の嫌な面、見たくない面を見ざるを得なかったろう。余裕のない状況で、自分自身もまた義理を欠く行為を避けられないことがあったと考えられる。ようやくのことで、苦境からの脱出に成功し、金銭に関わる心配からは解放される。その時の喜びは一通りではない、かなり大きなものだったろう。その影響からか、

この時期に書いた作品である「杜子春」には、自身の願望や辛い経験がかなり大きく反映してしまう。その生々しさを自ら感じ取った芥川は、この作品の発表を一時見合わせたのではないか。

しかし、それから約一年後、長男の比呂志が誕生する。このことが、芥川にとって持つ意義は小さくなかったと考える。芥川はこの時、改めて一家の家長としての責任を自覚しただろう。既に妻と結婚した時点で、芥川は夫Ⅱ一家の家長だったわけだが、ここにさらに、父としての新たな役割が付加される。夫として、父として、子を産んだばかりの妻と、新たに芽生えた小さな命を守り、家庭を営んでいかねばならない。

結婚した直後の家庭は、金銭に関する不如意もあり、決して明るいとは言えなかった。しかし、金銭に関わる奔走を終えたことで、家庭を明るく方向へと向ける余裕が生じる。こうして、新しい家族が増えた今、実現しなければならぬこととして意識されたのは、夫として、父として、そして一家の家長として、強い愛情で結ばれた家族を築いていくことだったのではないだろうか。こうした、夫Ⅱ家長としての自覚が、初めての子を授かった芥川の胸には、強い喜びと共に生じていたと考えられる。

杜子春が口にする、「人間らしい、正直な暮し」の台詞は、ごくまっとうな、平凡ながら満ち足りた生活への意欲、と読むことができる。こうした意欲は、金銭に関わる奔走を終え、改めて家族と向き合う余裕を得た芥川の実感を、強く反映したものに他ならないだ

ろう。やはり、杜子春の心を動かすのは、友人や恋人といった血縁者以外の人間ではなく、血を分けた家族でなければならなかった。無条件の愛情で動く、しかも家族である人間が見せる尊さこそ、芥川が書きたかったことなのだろう。作品発表時の芥川が、息子という新たな家族を迎え、一家の家長としての責任を改めて自覚していたことを、そしてその責任は、大いなる喜びを伴うものであることを、我々は見逃すべきではあるまい。

妻である文が、子を産んで母となったことについても、検討しておかねばならない。先に見たように、大正八年二月に執筆された「杜子春」には、理想の母に対する芥川の願望が反映していると考えられる。そのことは、芥川が作品の発表を一度は見送る判断を下す一因となつたろう。芥川にとつて、母の話題は変型された形でも、作品で扱うことが躊躇される対象だった。しかし、息子が生まれ、妻である文が、母としての顔も持つことになったことが、芥川の内部に変化をもたらしたのではないか。

実の母は、自作において容易に触れることのできない、負の感情を伴う対象であった。しかし、子を産んだばかりの妻に対しては、そうした感情などおおよそ湧くはずもない。彼女と、彼女が産んだ新しい命に対し、芥川は無条件の愛情を注いでいくことになる。ここで、嫌悪する対象であった実の母とは異なる、守るべき対象であり、自身の妻でもあり、そして誕生したばかりの母でもあるという存在を、芥川は持つことになった。

この母と、その子を守る上で必要になる金銭のことは、苦勞の末、解決することができた。しかし、人間関係は金銭、すなわち利害関係のみで結ばれた場合、いざというときに簡単に崩れてしまう。必要となるのは、家族が互いをかけがえのない存在として結びつける、無条件の愛情ということになる。息子が生まれ、新たな家族の一員が加わるに当たり、利害関係を超えた関係性によって結びつけられた家族を築いていくことを、芥川は強く意識したのではないか。このように見た場合、杜子春が口にする「人間らしい、正直な暮し」の台詞は、利害関係ではなく、無条件の強い愛情によって結びつけられた家族を作り上げていくという、芥川の宣言と見ることができる。

芥川は、結婚の半年前、大正六年九月二十八日付の書簡にて、やがて妻となる塚本文に対して、次のようなことを述べている。

「世の中の事が万事利巧だけでうまく行くと思ふと大まちがひですよ、それより人間です ほんとうに人間らしい正直な人間ですそれが一番強いのです」

この書簡は、共に新しい家族を構成することになる人間に対して、心構えを説いたというだけでなく、家族というものに対する、芥川の真率な思いを伝えている。「世の中の事が万事利巧だけうまく行くと思ふと」は、人間は利害関係でしか動かないという、杜子春の冷たい認識を彷彿させる。これに対し、「ほんとうに人間らしい正直な人間」は、杜子春が口にする「人間らしい、正直な暮

し」と文言が重なっており、芥川が理想とする人間像を、率直に述べたものと見ることが出来る。「ほんとうに人間らしい正直な人間」であろうと努めることによつて、初めて家族は血の通つた関係として互いに結びつき、存続していくことが可能になる。家族を結びつけ、支えるものは、「人間らしい正直な」あり方以外にはないと、この時点で、既に芥川は捉えていたのだろう。この書簡で示された人間観、家族観は、後年書かれる「杜子春」と確かに響き合っている。

## 六 大正時代の文学作品として

ここまで、杜子春の「人間らしい、正直な暮し」の台詞を中心に、作品を芥川の実生活上の出来事と重ねる形で検討してきた。ここで、作品を同時代の文脈の中に置いた場合、舞台が昔の中国であるため、大正時代の文学作品ならではの意味を見出すことは困難かも知れない。しかし、こうした視点による検討は、既に先行研究にて何度か試みられている。ここでは、それらを手掛かりに、作品が持つ同時代的な意味を考察してみたい。

杜子春は、世俗を超えた価値を身に付けるべく仙人となる修行をしたが、母と再会したことで、再び世俗の人間として生きる決意をする。ただし、このときの杜子春は、利害関係でしか動かない人間しか知らない、かつての杜子春ではない。この世には、身を投げ出

しても大切な相手を守りたいという、無条件の愛情で動く人間が確かに存在することを知っている。しかもそれは、決して遠くにあるのではなく、身近にいる家族こそが、そうした愛情を身に体した存在に他ならない。こうして杜子春は、世俗を超えた価値を無理に追いつめることは止め、身近にある小さな幸せを、大切に守っていくことを決意する。それは、仙人になった場合とは異なり、大きな変化に乏しい、当たり前の毎日が続いていくことを選択したことではある。しかし、そうした毎日にごそ尊い価値があることを、今の杜子春は知っている。

山敷和男は、杜子春は「大正の小市民の祈りを代表している人間」であり、「杜子春をそういう人間に描き上げることによつて、『杜子春傳』の近代化が完成したといえるであろう」<sup>10</sup>、と述べる。

「羅生門」(大四・十一『帝国文学』)に端を発する芥川の創作方法は、内外の文学作品から材を得て、これに近代的な解釈を加えるというものであった。「杜子春」もまた、原典である「杜子春伝」に改変を加えており、特に母と息子の関係において、その変更は顕著に認められる。身を投げ出しても息子を守ろうとする母の姿を見て、家族愛の尊さに目覚めるといふ結末部の展開は、芥川の改変による、この作品の独自性と言える。この独自性、すなわち平凡だからこそ見失いがちな家族愛の尊さの提示を、山敷の表現を借りて、「大正の小市民の祈り」、すなわち、この作品が書かれた時代ならではの要素と考えたい。

もちろん、単に家族愛の尊さということであれば、時代を超えて意義を持つ、普遍的な価値として通用するものであり、時代的な意味を見出すことは難しい。そこで、作品から、大正時代の人々に生じた価値観の変化を読み取る、前田愛の指摘を参照しておこう。

「杜子春がさまざまな試練に耐えて仙人になるというのは、まさに明治の立身出世主義なのですけれども、そういうものがここ〔最終章〕で否定されて、もつとやさやかな幸福というのが目標になってくるわけです。それが、『杜子春』という物語です。大正時代になると、もう末は大臣か大将かといった誇大な立身出世主義は影をひそめてくる。それが、この芥川の『杜子春』に非常につきりと表われてくるわけです。」<sup>11</sup>

利害関係でしか動かない人間たちに失望した杜子春は、世俗を超えた価値観を求めて、仙人になることを目指す。確かにこれは、明治時代における苛烈な立身出世主義と重ねて見ることができる。しかし、杜子春は仙人になることは自ら断念し、無条件の愛情によって結びつけられた家族とともに営む、平凡な生活に価値を見出していく。これこそが、明治時代には顧みられなかった、「もつとやさやかな幸福」であり、大正時代にはこうした「幸福」がより積極的に求められるようになったのだろう。このように見た場合、「杜子春」における家族愛の尊さの提示は、やはりこの時代の価値観を反映した、「大正の小市民の祈り」と捉えることができる。

「大正の小市民」ということでは、杜子春が手に入れる家に

ついても見逃せない。杜子春は、「人間らしい、正直な暮し」を築く拠点として、鉄冠子から「桃の花が一面に咲いてゐる」、「一軒の家」を贈られる。この家に関して、前田愛は同時代ならではの意味を読み取っている。

「この山の麓にあるやさやかな家、桃の花が咲きほこっているやさやかな家、これらは陶淵明のイメージを踏まえながら、実は大正中期の小市民の小さなユートピアを描き出している。もつと具体的にいえば、都市の郊外に建てられた文化住宅、そういったものを連想させる。そういう大正という同時代の文化的なコンテキストを、この『杜子春』というテクストのなかに芥川は引用しているのではないだろうか。」<sup>12</sup>

近代化に伴い、多くの人間が故郷を離れ、職を求めて都市の中心部で生活する。それは場合によっては、家族が離ればなれになって生活することを強いられることにもつながる。しかし、都市の中心部を避け、喧噪から離れた郊外での暮しを選択すれば、そこには家族とともに営んでいく、穏やかで平和な毎日が待っている。杜子春は、鉄冠子から贈られるという形ではあるが、唐の都である洛陽を離れた、「泰山の南の麓」に家を得ている。そこで杜子春は、家族とともに幸福をかみしめながら、「人間らしい、正直な暮し」を築いていくのだろう。家族愛の尊さの提示だけでなく、杜子春が手にする家に関しても、大正時代ならではの価値観が潜んでいると言える。

このように見てくると、昔の中国を舞台とした「杜子春」においても、作品が発表された大正時代ならではの意味を様々に読み取ることができる。そして、ここで検討したいいくつかの要素には、やはり家族という共通項を見出すことができる。立身出世を求めて苛烈な競争に身をさらし、家族と離れてでも都市の中心部に身を置く生活は、金銭的な豊かさは得られるかも知れないが、精神的な面では余裕のない日々を送ることを覚悟しなければならぬ。それでも、世間的な成功を取めることを優先すべきであるという価値観が、明治時代までは人々に支持されてきたのだろう。この価値観において、家族、詳しく言えば家族とともにある生活や、これを支える無条件の愛情といったものは、二義的な意味しか持たない。

しかし、大正時代にはこうした価値観には変化が生じる。身心の不調を引き起こしかねない、都市の中心部での生活は避けられ、喧嘩から離れた郊外での生活が志向される。そこには、家族とともにある平凡だが穏やかな日々が待っている。金銭面では多少の不利が生じるかも知れないが、家族と過ごす心豊かな生活は、それを補って余りある。家族とともにある生活は、金銭や世間的な名誉とは引き換えにならない、高い価値を秘めている。大正時代においては、家族観の変化に伴う、こうした価値観が人々に支持され始めたと考えられる。

「杜子春」は、こうした価値観を巧みに作品に導入し、「人間らしい、正直な暮し」、すなわち、無条件の愛情で結びつけられた、家

族と共にある生活が持つ魅力を、読者に提示している。大正時代の文学作品ならではの価値を、「杜子春」がはらんでいることを、我々は見逃すべきではない。

「杜子春」における、杜子春の人間観、すなわち、人間は利害関係でしか動かないという捉え方は、この作品の執筆に先立つ一年ほどの期間に、芥川が職業、すなわち金銭に関わることで苦労したことが反映しているだろう。一度は世俗の世界に別れを告げようとした杜子春だが、家族の愛が尊くかけがえないものであることを知り、平凡だが、ささやかな幸福に満ちた生活を手にする。その過程においては、芥川の理想の母に対する願望がはしくも表れてしまっている。そのためか、作品は発表が一度は見合わされたが、息子の誕生という出来事を経て、家長としての新たな自覚を得た芥川は、自信を持って本作を世に出す。そこには、大正時代ならではの価値観が様々な形で導入されている。

本作の成立、及び作品内容を見ていく上で、家族という要素は重要な意味を持つ。芥川自身において、妻との結婚、息子の誕生という実生活上の出来事は、家族というものの持つ意味について捉え直す機会となっただろう。同時に、大正という時代においても、家族の捉え方は以前と比べて変化が生じており、その変化は「杜子春」における家族の捉え方と、確かに響き合っている。

本稿では、家族ということを手掛かりに、作品について検討して

きた。芥川龍之介という個人において、また、大正という時代において、家族の捉え方が変化したが、本作の成立において欠かさない要素となっている。杜子春が口にする、「人間らしい、正直な暮し」の台詞には、我々が考える以上に複雑かつ多様な意味が込められている。

注

(1) 芥川龍之介作品の引用は、『芥川龍之介全集』全二十四巻（岩波書店、平七〇十）による。引用に際しては、正字は適宜略字に改め、ルビは原則として省略した。

(2) 「御伽噺の世界で」（『鷗外と漱石 明治のエートス』昭五十八・五、力富書房）。

(3) 「もつと己れの生活を書け、もつと大胆に告白しろ」とは屢、諸君の勧める言葉である。（中略）諸君の僕に勧めるのは僕自身を主人公にし、僕の身の上についた事件を臆面もなしに書けと云ふのである。おまけに巻末の一覧表には主人公たる僕は勿論、作中の人物の本名仮名をずらりと並べると云ふのである。それだけは御免を蒙らざるを得ない。——」（芥川龍之介「澄江堂雜記」（原題「雜筆」）大十二・十一「隨筆」）

(4) 「杜子春伝」の参照には、『新釈漢文大系第四十四巻 唐代伝奇』（昭四十六・九、明治書院）を用いた。

(5) 芥川の実生活上の出来事の確認については、『芥川龍之介全集』第二十巻（平十・三）所収の年譜（宮坂覺作成）を参照した。

(6) 「唐代小説『杜子春伝』と芥川の童話『杜子春』の発想の相違点」（昭四十四『比較文学』）。

(7) 越智良二もまた、『杜子春』の陰翳」（昭五十四・十二『愛媛国文研究』）にて、「杜子春」における母の描写に、芥川の願望が反映していることを読み取る。「この『杜子春』の中では、問題は、単なる子供の側か

らの一方的な孝心ではなく、母親の側からも、子供の側からも、双方から手を差し伸べあつた心の触れ合い、愛情の通い合いにあるので、現実には其れを望み乍らも遂に母親の側から差し伸べられる愛を知ることがなく、口を利用して貰うことのなかつた芥川の、深い憧れ、見果てぬ夢が、袖ぎ出されているようにも思われるのである。」

(8) 「蜘蛛の糸」から『杜子春』へ」（平十三・三『二松学舎大学東洋学研究所集刊』）。

(9) 注（8）に同じ。

(10) 「『杜子春』論考」（昭三十六・九『漢文学研究』）。

(11) 「文学のなかの子どもたち」（栗原彬ほか著『学校化社会のストレンジヤール』子どもの王国』昭六十三・二、新曜社）。

(12) 「文学テクスト入門」（平五・九、ちくま学芸文庫）。